

環境フォーラム

勇払原野の新しい環境保全の試み 苫東環境コモンズがめざすもの

2009年9月19日(土)13:30～
苫小牧市サンガーデン

1. 開会

(司会)

定刻になりましたので、本日の環境フォーラムを始めさせていただきますと思います。

私は、NPO法人苫東環境コモンズ設立準備事務局の孫田と申します。

今日は、午後からようやく好天に恵まれ、大変よいお天気の中、わざわざ室内にお越しいただきましてありがとうございます。私は、今日はこのまま司会進行ということで務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。

今日資料をお持ちいただいたかと思いきやけれども、その中身を確認させていただきます。上から順に申し上げます。

1番目が本日のプログラム、2番目はNPOの資料ということで、資料と趣旨書があります。3番目は、後ほどお話しいただく小磯先生の資料です。次に辻井先生の資料、今日のお話の主題とブラキストンの日記で、二つあります。5番目は、パネルディスカッションのときに使用する草苅さんの資料です。6番目が苫東開発の概要、7番目が苫東地区の5万分の1の地図、8番目が苫東のフォトコンテストの作品集。そして9番目、これも苫東の地図ですけれども、山手線の大きさと比較した地図が入っております。10番目が美々川自然再生計画書(概要版)、11番目が美々川関連のニュースレター、そして12番目として「開発こうほう」の「マルシェノルド」という冊子が入っており、これは小磯先生が編集を担当された分でございます。今の資料のない方がいらっしゃいましたら、事務局までお申し出いただければと思います。

それでは早速、本日のフォーラムに入らせていただきます。

最初に、主催者を代表いたしまして、環境コモンズ研究会座長の小磯先生からご挨拶を頂きます。小磯先生には引き続き、基調講演もお願いしたいと考えております。

先生のご略歴につきましてはプログラムに書いてありますので、ご欄になっていただければと思います。では、小磯先生、よろしく願いいたします。



2. 主催者代表挨拶

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました釧路公立大学の小磯でございます。本日は、環境コモンズ研究会の座長という立場で最初にご挨拶をさせていただき、その後、基調報告ということでお話をさせていただきたいと思っております。

今日のフォーラムは連休の最初の日ということで、こんなに大勢の皆さん方に集まっていただくということを想定しておりませんでした。本当にありがとうございます。それだけにこの取り組みを、限られた時間ですけれども、皆さんにしっかりとご理解いただき、いろんな意味でこれからの応援・支援を頂きたいと、あらためてそういう気持ちであります。

最初に、環境コモンズ研究会とは一体何かということをお話ししたいと思います。私は今、釧路公立大学におりますけれども、その私が何で苫東の再生と環境コモンズのことをお話しするのか。それにはいろんな背景があります。

私は今の大学で活動する前、北海道開発庁で長く仕事をしておりました。そこで、最初にかかわった仕事が、苫小牧東部地区の工業基地開発の取り組みでした。現在は、地方の現場で、特に国とか政府部門に頼ることが難しい状況の中で、どうやって地域が自力で元気になるかというテーマで研究活動しております。そういうものが交錯していく中で、私自身は財団法人北海道開発協会での公益事業としての研究活動をお手伝いしておりました。そして、苫東の開発で第3セクターとして緑地部門に長くかかわっておられた草苺さんが現在、財団法人北海道開発協会の開発調査総合研究所で主任研究員として研究活動に携わっておられます。彼はライフワークとして、苫小牧の工業基地開発の中で位置づけられた緑地の保全管理という仕事を通じて経験してきたものを、これからの時代の新しい取り組みとして展開していけないかということで、「苫東地区における環境コモンズ」という新しいコンセプトの取り組みに向けて準備をしておられます。それを、北海道開発協会という財団の研究会活動ということで支援していこうと、昨年度からこの研究会が立ち上がりました。研究会メンバーは、私と北海道環境財団理事長の辻井先生、イコロの森で森の学校長をされている原田さん、NPO法人ねおすの宮本さん、それに、ある意味ではこの取り組みのキーパーソンである草苺さん、そして現在の苫東会社からは、高橋専務にもオブザーバーということで参画いただきました。それで昨年度から、研究会を進めてまいりました。研究会の役割は、新しく立ち上がるNPO法人をバックアップし、支援していくということです。今日は第3回の研究会という位置づけであり、なおかつ、新しい苫東環境コモンズを目指すNPOの立ち上げに向けての準備の場という位置づけがあります。

ということで、ご挨拶を含めて背景をお話しさせていただきました。



3. 基調報告

「環境コモンズによる苫東の再生」

環境コモンズ研究会((財)北海道開発協会)座長
釧路公立大学長 小 磯 修 二 氏



これから、「環境コモンズによる苫東の再生」ということでお話をさせていただきたいと思います。今日お集まりの皆さんは苫小牧の地域にいろんな意味でかかわっておられ、森林・緑地の保全管理にさまざまな興味、ご関心があるかと思うのですが、あらためて、このNPOを主体とした取り組みについて、環境コモンズとは一体どういうものか、そして、苫東という地域の財産である工業開発を進められてきた空間の再生を併せて考え、今日のフォーラムのスタートにしたいと思います。

苫東環境コモンズとは何か。結論から言えば、苫東の豊かな自然を「守りながら利用させてもらう」仕組み作りであり、土地の重層的な利用によって持続可能な環境を保全するという事です。これだけではなかなか分からないでしょうから、時代をめぐる背景、歴史的な流れをお話しさせていただきます。

最初に、苫東について振り返ってみたいと思います。また、今置かれている状況もあらためて考えてみたいと思います。

苫小牧東部に大規模な工業基地を造るプロジェクトが38年前、1971年にスタートしました。日本が高度成長真っ盛りの中です。日本が戦後経済発展を遂げていく中で、国の中に資源がほとんどない。外から資源を持ってきて加工し、付加価値を高めて外に出し、経済発展をしていく。そのためには港が要る。港に入ってきた原材料を加工し工業生産をする工業団地・工業基地が足りないという状況が、1960年代後半からありました。苫小牧地区はもともと、人工的に掘り込み港湾を造って、それで開発を進めていく北海道開発の一つのモデル地区で、当時は高度成長を遂げていた時期ですから、苫小牧東部地域に大規模な工業基地を造ろうということでスタートをしたわけです。苫小牧東部の工業基地開発は、土地利用の面積で1万1,250ヘクタールという、当時東洋一の、非常に大きなスケールのものでした。1万1,000ヘクタールを超える土地利用計画の中で一番の特徴は、3,400ヘクタールを緑地に使うというプランだったわけです。これは当時、世界でも画期的なものでした。

私はこの基本計画ができた翌年、1972年に北海道開発庁に入り、最初に担当したのが苫東の開発計画をいかに推進していくかという仕事で、推進主体の制度づくりや環境問題を担当しました。日本では60年代後半から、公害が非常に大きな問題になっていました。工業生産をして日本の経済力を高めながらも、環境にいかんにしっかり向き合っていくか。そういう背景もあって、3,400ヘクタールという工業基地全体の3割を占める緑地を工業基地計画の中に置くということで、公害防止、環境問題に向き合うという役割がありました。私は、緑地の管理だけではなくて、いかに公害のない工業基地開発を進めるかということで、当時としては先駆的な環境アセスメント調査などにも取り組みました。当時の環境アセスメント作業や緑地の調査は北海道開発庁の調査費で行われており、道庁、北大とか関係機関の皆さんと一緒に調査委員会を組織して検討を進めていました。そのときに緑地の調査を担当する委員として参加していただいたのが、当時北大におられた辻井先生でした。草薙さんは、そのご縁で、苫東会社に緑地の管理・保全・整備の担当ということで入られました。

いずれにしても、経済情勢の変化、主体となる第3セクターの経営の破綻という状況の中で、新しい時代に対応してこの苫東の空間をどういう形で活用していけばいいかということが今、大きなテーマ

として求められています。1万2,000ヘクタールの空間が苫小牧という地域の中にあり、もともとは工場を誘致するという目的でした。ところがその後の変遷の中で、現在は、さまざまな機能を複合的に開発していこうということになっています。さらには、昔は職住分離という考え方だったのですが、今は「職住近接」という考え方です。ただ、緑地をしっかりと持って、緑地計画を進めていこうという当初の考え方は今も貫かれています。そういう中で、新しい発想で、どうやって苫小牧地域の財産である苫東の空間を有効活用していけばいいか。この問題は、苫小牧地域だけではなくて北海道にとってはもちろん、苫東開発というのは日本のプロジェクトとして進められたわけですから日本国民にとっても大きな課題であると言えます。以上が、苫東をめぐる今までの流れです。

その中で、北海道開発協会・開発調査総合研究所による環境コモンズ研究会が、2008年度からスタートしたわけです。では、環境コモンズの研究会で目指すところは何か、ということですよ。

苫東の空間、特に緑地について、NPOを主体に「苫東環境コモンズ」という形で保全しながら利用を進めていくという動きが、草薙さんを中心にしたお仲間や、北海道にあるさまざまなNPOとか団体のネットワークの中で進みつつありました。ただ、その取り組みに対してどういう方向を目指していけばいいのかわからない。わが国の社会経済情勢をめぐる中で、どういう課題を乗り越えながら、どういう取り組みをしていけばいいのかわからない。それを北海道開発協会の調査研究事業の中で環境コモンズ研究会が担っていく。こういう役割で研究会がスタートいたしました。ここでの検討の大きなポイントは、「コモンズ」という言葉の概念です。その意味を、せっかくの機会ですので皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

「コモンズ」という言葉を聞かれて、皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。私は今、社会科学の分野、特に経済系の大学におりますが、「コモンズの悲劇」という言葉がよく使われます。「コモンズ」は、日本語では「共有地」という言葉で置き換えられることが多いのですが、「コモンズの悲劇」という経済学で使われる言葉で例示になるのは、イギリスの放牧地です。放牧地はみんなが使える。みんなが使える土地というのはどういう使い方をするか。それぞれがほかの人に迷惑をかけないように秩序よく使われる場合もありますけれども、みんなが「私一人ぐらいは多めにそこを使ってもいいだろう」という思いで使うと、共有地としてのコモンズの利用は破綻してしまいます。「自分一人ぐらいはいい」という共有地に対するかかわり方があると悲劇的な結果になる、というのが「コモンズの悲劇」と言われるものです。

ただ、今、その言葉がよく使われている背景には、環境・経済の中でコモンズの悲劇に相応する動きが世の中に多く出てきているということがあります。例えば、生活排水、工場廃水によって、水質の汚染問題が出てきました。「私の家庭でちょっとぐらい汚水を流しても、そんなに影響はないだろう」と。でも、みんながそう思うと、大きな問題になる。それは大きな負担となって、大きな税金をかけて解決していかなければならない。車の問題もそうです。自動車通勤はだめといっても、「私一人ぐらい車を使っただけで、大した迷惑かからないだろう」と。でも、みんながそれをしてしまうと、車による渋滞や環境問題が起きてくる。コモンズという言葉が使われている背景には、実はそういう時代背景があると思っております。

ただ、われわれがこの研究会で、苫東の緑地空間をこれからどういう形で利活用していこうかというところのコモンズというのは、少し意味合いが違います。今、コモンズという言葉が新たな意味合いで、いろんなところで使われるようになってきました。特に英連邦の国に多いのではないのでしょうか。例えば、イギリスもそうですけれども、アメリカのボストンという町に行くと、真ん中に素晴らしい緑地公園があります。あれを町の人たちは「ボストンコモン」と呼んでいます。単に公園とは言わない。そのコモンズとは、公園なのですからけれども、みんながそれぞれ、例えば自分の負担でベンチを置いて、

ほかの人にも使ってもらおう。一つの空間に対してさまざまな人がいろんなかわりを持つことで全体の価値を高めていこうという意味合いが、コモンズという中にあるように思います。

私の経験なのですけれども、昔、仕事でスコットランドとの国際交流の機会があり、そこから来た方に札幌を案内したことがあります。大通公園を案内していたとき、通訳の方が「大通公園というのは、どう訳せばいいのかな。ロードかな、パークかな」と言いました。すると、スコットランド省の高官が、道路空間の真ん中の公園の中で市民が楽しそうに遊んでいるのを見て、「ここはコモンズではないか」とおっしゃいました。コモンズというのはそういう意味なのだと分かりました。一つの目的の利用だけではなくて、さまざまな利用がうまく機能し合って、結果的に空間の価値を高めていることだと。

最近、私自身も、大学人の立場としてコモンズにかかわる取り組みがあります。これはアメリカで提唱されて、世界的に広がってきているのですけれども、「ラーニングコモンズ」という取り組みが大学の中で一つのテーマになってきています。「ラーニング（学ぶ）」のコモンズとは一体何かと思われるかもしれませんが、実はこれは大学にある図書館なのです。大学にある図書館という空間、機能を、ラーニングコモンズということでこれから活用していこう、再生していこうという動きが、アメリカを中心に起こってきています。図書館というのは、本を借りて、そこで読んだり、たまにはそこで勉強をしたりという静かな空間です。でも、考えてみたら、ありとあらゆる知的情報がそこにあるわけです。最近の図書館は、検索システムでいろんな情報を収集できる。そこに、大学の中の社会科学も、理工学も、医学の人もみんな集まって、議論し合うことによって新しい知的生産ができるのではないかと。学生もそこに持ってくる。新しいIT技術をどんどん持ち込むことによって、新しい知的生産の場になる。大学といっても、けっこう縦割りです。ところが、まさに共通の場としての図書館にみんなが集まることによって、大学全体の知的拠点となりその力を高めていこうという動きが出てきております。ささやかですけれども、私の大学でも図書館の中にゼミ室を持ち込んで、そこにレファレンスの能力を持った図書館のスタッフも入れて、一緒に議論するというをしています。実は、これもコモンズなわけです。幾つか事例を申し上げましたけれども、結局、ややもすると今まで閉鎖的に、排他的に使われていたところを、利用を広げることによって、空間、場所、土地の価値を高めていこうということです。これからは、コモンズをそういう意味に考えていくことによって、新しいコンセプトとして大事な言葉になっていくのではないかと考えております。

ではこれから、コモンズを考えていく視点で、問題提起といいますが、一緒に考えていきたいと思えます。何で今、コモンズという言葉がこういう形で語られるようになってきたのか。一つは、「地球は限りある資源」という意識が背景にあるのではないかと思います。これは皆さん、重々ご存じのことだと思います。オイルショックを1970年代の前半に経験しました。それから、今は地球温暖化の問題があります。いずれも、資源は限りあるものということを示しています。ただ、それを意識するのは難しいことで、大きな問題が出てくることによってあらためて、地球が人類共通のコモンズ、資源であることを意識させられるわけです。これが私は原点ではないかと思います。そうなってくると、地球というものを排他的に、独占的に、縦割りに使っていくという無駄をいかになくしていくのか。そこで今、共生とか連携とか協働という言葉が出ていますけれども、背景にはこういう流れがあるのではないかと思います。この流れを時間軸、時の流れの中で見ていくのが、「持続可能性」という、最近非常によく使われている言葉です。限りある環境資源を子供や孫の世代にもしっかりとつないでいながら、それに見合った開発をしていこうということです。それを空間軸、つまり一つの都市、一つの地域、空間に当てはめたものがコモンズではないかと思うわけです。それをいかに支えていくか、活動していくか。その関係軸として、NPOの活動の範囲が広まってきました。あるいは、ソーシャルキ

ャピタルという側面から見ても、民間、私的な行為の中で公的な活動、営みにかかわっていく広がりがあります。これは、コモンズを考えていく視点の一つとしてあるのではないかと思います。

それから二つ目。コモンズというものを考えていく中で、土地の問題があります。私も地域の開発問題に長く携わってきましたけれども、日本の場合、政策を考えていく中で、土地利用の硬直性、つまりここは農地、ここは環境を守る土地と単一の目的に規定されてしまうと、なかなかほかの柔軟な使い方ができないという現実があります。この問題は土地の私有制、個人の所有権というのが強く認められているこの国の土地利用の仕組み、そこに行き着くわけです。司馬遼太郎という小説家は、日本がどういう形で変わっていったか、人に着目して歴史を描き切った方ですけれども、彼が最後に行き着いたテーマは、この国の形がどうあるべきかということです。彼がずっとこだわっていたのは、土地制度です。日本における土地の私有制度というものが日本の国の形を悪くしているということを叫んでいました。それは象徴的な事例です。地球という規模の中で限られた資源というものを考えていく中で、土地の利用制度をより機動的に、“公”と“私”の在り方というものをとらえながら、その空間、土地の持つ価値をいかに高めていくか、そのシステム、仕組みを、いろんな法制度はありますけれども、いかに知恵を出して地域内の機動的な連携によって構築していくかということです。これが、コモンズを考えていく上でのもう一つの大事な視点ではないかと思っております。こういう取り組みが、これから地域が自立的に自分たちの力で発展していくときの、それを支えていく大きな仕組みにもなっていくと思います。与えられた制度、仕組みの中で思考するのではなくて、苫小牧であれば苫小牧、苫東であれば苫東、その土地の持つ価値を、自分たちの工夫と知恵でいかに高めていけるのかという視点に立って、この機会にコモンズの問題を考えていく必要があると思います。

次に、「苫東再生」という視点から考えていきたいと思っております。

苫東開発は一時期、「破綻」という言葉で言われました。本当に苫東開発は破綻したのでしょうか。1万ヘクタールを超える空間、これは公共的な営みによって公的な土地として確保され、それを民間が主体の所有形態でこれからのさまざまな開発、緑地保全を含めて進めていこうということで、その空間そのものは変わらないわけです。それを転がしていく仕組みに問題があって、それを是正しながら進めてきているということです。われわれが考えるべきは、将来に向けて1万ヘクタールを超える空間を次世代にどのようにつないでいくのかということだと思います。

そこで、苫東の空間というのは一体、だれのものかということです。今、苫東という会社が所有する形態になっています。この地域、この空間を一つの会社の所有物として考えることでその土地の価値をどんどん減らしていく状況があれば、それはよくない。しかも、苫東空間には、工業基地開発を整備していくに当たって、国民、道民の非常に多くの税金が注ぎ込まれています。そういう意味では国民のものであり、道民のものであるわけです。しかも苫東の空間は、私自身もかかりましたけれども、農地の転用手続きはすべて終わっている、非常に土地利用規制の少ない、自由度の多い空間なわけです。しかも、ゆとりのある緑地空間の活用がある。多くは申しませんが、コモンズという自分たちに手の届く土地とか空間に対して、自分たちの知恵と工夫でより大きな価値を与えていく、その対象として苫東再生をうまく当てはめていけば、いろんな取り組みの可能性があるのではないかと思うわけです。

さて、今日のテーマにだんだん近づいていくのですけれども、苫東における緑地がどのような価値を持って、これからどういう形で北海道、国、あるいは苫小牧地域のために寄与していくことができるかということです。今、NPO苫東環境コモンズという新しい動きがあるわけですが、その原型は苫東の取り組みが始まって以降、すでにいろんな形であるということで、これを幾つかお話ししたいと思います。

これは草苺さんからお借りしたスライドなのですが、苫東地区では森林愛護組合が立地企業も入った形で、山火事の防止とか、すでにいろいろな取り組みを行ってきています。「育林コンペ」というのはこの写真なのですが、素晴らしい広葉樹が残っていて、そこに触れ合い、親しみ、自ら参加する若者の活動が、この苫東の緑地では長きにわたって行われてきています。こういうように、苫東環境コモنزの原形とも言える活動がすでにあるということです。



これは遠浅町内会です。私もこの間、おじゃましたのですが、ここにアイリス公園というところがあります。遠浅町にある町内会の方達が苫東地区の緑地を無償で管理し、維持する活動を行っています。周辺には遠浅町の住宅団地があり、そこには小さな農園もあります。苫東の持っている緑地と自分たちが住む生活空間が見事にタイアップする中で、お互いに価値を高めているということです。この当時は北海道企業局（現在は苫東会社）と町内会との間で、無償の使用貸借契約という形で続けられてきたというお話を聞きました。これはまさにコモنزだと思います。こういう取り組みの原型がすでに、苫東の緑地の中にあるわけです。



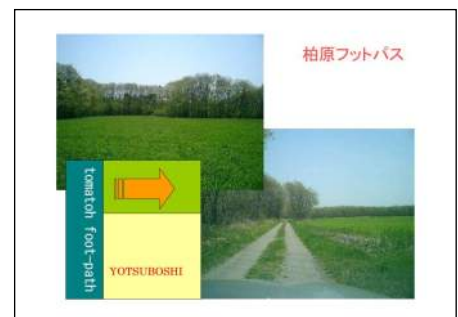
これは「苫東雑木林のファンクラブ」というスライドなのですが、これは手稲の方からやって来られた方達（左）、そして間伐ボランティア「札幌ウッドィース」の皆さん（右上）です。苫小牧の背後には札幌都市圏があります。そういう方達が森を愛する、そして緑地との触れ合いをするという中で、自分たちの生活の質を高めていく。この今までの交流というのは非常に長いものがあるということです。



こちらの写真（右下）は、道外から来られた方と地元の方達との交流です。

今回、フォーラムで議論する新しい苫東緑地を対象にした苫東環境コモنزというNPOの取り組みは、38年間の苫東の取り組みの中で、地域と苫東空間とが有機的に結びついて、取り組みの原型がすでにあるということです。これを将来、どういう形で発展させていけばいいのか、そのコンセプトをあらためて皆さんと議論しながら、新しい取り組みを考えていきたいということです。

これは「柏原フットパス」です。柏原地区は苫東の中でも大変魅力のある地区です。ここの景観を写真で見ると、本当にドイツかイギリスのフットパスのような緑地空間があります。こういうところでフットパスという営みができ、こういう魅力あるところで研究をしてみたい、企業活動をしたみたいというような企業がきっと現れると思います。実はこういう取り組みの延長として、当初目指した日本の経済発展、北海道の工業生産を支えていく機能を逆にこういう魅力が呼び寄せるといっても、可能性として



十分あるのではないかと思います。

NPO活動が、今日のフォーラムを契機に新しいスタートを切っていくわけですが、われわれ研究会で提起した環境コモンズのコネプトというのは、NPOの皆さんが、苦東だけではなくて、周辺の美々川、ウトナイ湖、イコロの森、素晴らしい勇払原野における自然と人間の生活、あるいは経済活動を含むさまざまな活動の一翼を担う活動という位置づけになるのではないかと思います。そういう中で、今まで苦東という空間が認識され、期待されていたものを超えた新しい価値が生まれてきます。これはもちろん、周辺の勇払原野におけるさまざまな活動、取り組みの連携の中で、ますます価値を増していく可能性があるのではないかと考えております。

私は、挨拶を含めて、今日のフォーラムにおける新しいNPOの立ち上げに、これから皆さんと一緒に考えていく一つの流れ、それから考え方の基本的なところをお話ししました。いずれにしても私がお話ししたかったのは、コモンズのところでお話ししたように、新しい時代において新しい皆さんの知恵、工夫で、1万ヘクタールを超える苦東という空間、その価値を高めていくことができるということです。今までの仕組みではない、新しい発想と新しい仕組み、地域連携の中でその価値を高めていける可能性があるように思います。また、われわれ研究会で議論してきた一つの結論も、その方向性を共有できるものでした。このフォーラムを契機に、新しいNPO法人「苦東環境コモンズ」という活動がこれから展開されていく、その可能性というものをあらためて私の話の中で皆さんにお伝えする形で、私の基調報告を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（司 会）

小磯先生、どうもありがとうございます。

引き続き辻井先生から、「勇払原野を楽しむ方法」と題して基調講演を頂きます。

辻井先生のご略歴につきましても、恐れ入りますがプログラムをご覧いただければと思います。

では、辻井先生、よろしくお願ひいたします。

4. 基調講演

「勇払原野を楽しむ方法」

(財)北海道環境財団理事長
元北海道大学教授 辻井達一氏



皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた辻井です。

小磯先生のお話にあった苫東の開発計画のときに、私はまさに緑地のプランの委員会に参加していました。そのとき小磯先生と一緒にあったときもあるのではないかと思いますのですけれども、当時のことはどうも思い出せません。ずっと後になって、たまたまこの苫東コモンズも含めているいろいろなときにお話をし、まさに同じ苫東に関連して一緒に仕事をさせていただいたということが分かりました。大変なご縁だったと思います。

今日お話ししますのは、ここでは勇払原野と呼んでおいたほうがいいのではないかと思いますのですけれども、勇払原野をこれから私たちは苫東コモンズという名前ですというふうには扱おうか。あるいは、私としてはむしろ、楽しむ場として考えたらいいのではないかと考えて、今日のテーマを「勇払原野を楽しむ方法」にしておきました。そこでまず、「原野」という言葉を考えてみたらいいのではないかと思います。

と言いますのは、原野という呼び方は、ほとんど北海道特有だといっているのではないのでしょうか。例えば、東北地方でもあまり聞いたことがない。しかし北海道では、原野という言葉がけっこう使われています。例えばこの勇払原野もそうです。それから、根釧原野というのにも使われています。それから、サロベツ原野もあります。これなんかはサロベツ湿原という名前ではなくて、ラムサール登録湿地のときにも、「サロベツ原野」という名前で登録されている。これなども典型的なものではないかと思います。

では、原野というのはどういうものをイメージするのかということになりますけれども、「あまり木の多くない原っぱ」というのが、一般的な理解ではないでしょうか。木がぎっしり生えているような、つまり森林地帯ではないわけです。そういうものは原野とは呼ばない。では、大きな木が生えているのは原野ではないのかというと、そうではなくて、例えば根釧原野なんかけっこう大きな木も生えていて、林もあるのですけれども、やっぱり原野と呼んでいる。だけれども、総体的には木の割合はそれほど多くない。それからもう一つは、同じ木本(もくほん)ですけれども、大きな木ではなくて小さい灌木の仲間、そういったものがまばらに生えているようなところ。あとは草ですけれども、それほどびっしり生えているわけではない。ところどころ裸のところもあったりする。

というのが、一般的な原野のイメージではないだろうかと思えます。ところが、北海道では昔、サロベツ原野、根釧原野、勇払原野というもの以外にも、原野というのは随分たくさんあったわけです。例えば石狩原野、美唄原野、幌向原野、対雁原野と、原野と呼ばれているほうがむしろ多かったのではないかと思います。あちこちに原野と呼ばれているところがいっぱいあったのです。今残っているのはそれほど多くないということなのですけれども、共通して言えるのは、比較的樹林が少なく、火山灰地とか湿原が混在していて、生物多様性に富んでいるとも言った方がいいかもしれない。随分いろいろな条件がある。湿ったところもあるし、乾いたところもあるというわけで、生物的にはなかなか面白いところだと考えていいと思います。

それで、もともと勇払原野と呼ばれたここに限定して言いますと、勇払原野というのはどんなところだったのかご覧に入れたほうがいいのではないかと思います。

今見ていただいているのは18世紀半ばころでしょうか、幕末のころに、この辺を描いた絵です。真ん中に見えるのは明らかに樽前山。樽前のちょっと右側に白っぽく見えているのが支笏湖です。その奥に見えるのが恵庭岳。この前景になっているのが勇払原野ということになるわけです。この中に描かれている湖が何を指すのか分かりません。ウトナイ湖なのか、あるいは弁天沼なのか、その辺ははっきりしませんけれども、それにしても随分あちこちに水面が見えます。ですから、原野の中にもっと水面があったのかもしれない。これは目賀田帯刀という幕府に仕えた絵師が描いた図なのですが、なかなかよく描かれています。

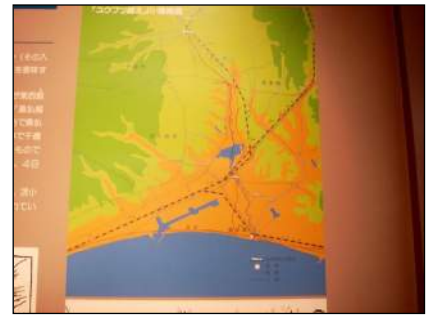


目賀田帯刀 勇払山道

それから、もう一つ面白いと思いますのは、勇払原野の様相は今とそれほど変わらない。変わらないといっても、苫小牧の町はもちろんここにはありませんし、道路があるわけでもありませんし、そういう点では現在と大違いと言えますけれども、風景としてはそれほど変わらないというあたりが面白い。

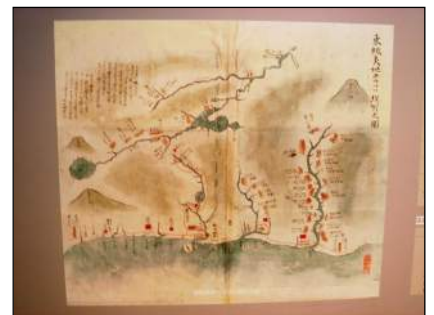
それから今、原野という言葉の定義みたいなことを言いましたけれども、ここには木がまばらにあり、この辺になりますと、これはどう考えても草原か……つまり、原野だというふうな風景が描かれているというわけです。そういう点で、なかなか面白い絵ではないかと思えます。

そして、そのころの風景、これは苫小牧の博物館に残されている「ユウフツ越え」の図というのですが、これは現在の掘り込みの港湾もかいてありますし、現在のことを示しますが、勇払越えのルートというのは、これはウトナイ湖ですけれども、この辺にずっと道がかいてあり、それが「勇払越え」という目賀田帯刀の図とほとんど一致します。



ユウフツ越え (苫小牧博物館)

そして、これはその図面です(東蝦夷地ユウフツ場所之図)。これになると地図というのが非常に分かりにくいのですが、どうやら樽前があって支笏湖があって、恵庭岳があって、千歳川がちゃんとここを流れて、ここは長都あたりの原野を示したのだと思うのですが、それを流れて、最後に石狩のほうへ流れるという図面です。こっちは美々川です。美々川の上流を丸木舟で奥まで行って、ここから千歳川の上流に丸木舟を引っ張りおろして、石狩に到達するというルートがかかれています。これなんかは当時の趣をよく表している。



東蝦夷地ユウフツ場所之図 (苫小牧博物館)

それから、これが苫小牧の博物館にある、ウトナイ湖からちょっと南のところから出土した丸木舟です。5隻一列に出ている。非常に有名なものです。中で一番大きいのは、これです。最大のものですが、これは重要文化財になっています。苫小牧の博物館というのはこのすぐそばにありますけれども、そこに今所蔵されています。この新しい博物館ができたときに、この丸木舟を東京の国立博物館に持っていくという話だったので、私が強硬に反対して、出土したところが一番近い博物館でこそ、そういうものが見られるようにすべきではないかといって、持って行くのを止めました。日本で今までに発見された中では、これは最大級の丸木舟です。これが多分、美々川の上流で作られたのではないかと推定されています。



丸木舟 (苫小牧博物館)

こういったものが残されていたところで、古い図面としては最後に

なるのですけれども、これは美々川の最上流部の船着場があったところ。こっちは原野ですけれども、ここが台地になるというのですけれども、ちょっと大げさに書かれています。ちょうどこの上のところに今現在、空港ができています。ですから、現在は、この船着場の跡は全く残されていません。残されていたらもっと面白かったと思いませんけれども。これがいわゆる苦東、勇払原野の古い形であったと言っていいと思います。

そして現在はどうかのだろうということですが、現在の状況を少しご覧に入れましょう。

これはご存じのとおり、ちょうど今の高速道路の東インターのところに沼がありますけれども、その状態です。考えてみますと、森林は昔よりもはるかに切られて、新しいもの、若いものになっているかもしれませんが、風景要素としてはそれほど大きな違いはないのではないだろうか。それから、エゾノコリンゴですけれども、こういった灌木の類がたくさんあったり、沼があったり、そこに生えている木には、ウメノキゴケというのですけれども、空気の非常にきれいなところによく育つ地衣類、こういったものが現存する。目賀田帯刀などが絵をかいたり歩いたりしたときとそんなに違いはないだろうと思われま。これはウトナイ湖周辺の状況です。

ウトナイ湖からさらに上流に、つまり美々川をさかのぼっていきますと、バイカモが見られる、美しいきれいな水が流れている川があり、その最上流部はご存じのとおり、湧き水がこんこんと流れ出る源流になる。こういうふうに、水が非常に大きな意味を持っている場所であるという、非常に大きな特徴を示していると言っていいのではないかと思います。

先ほどご覧に入れた極めて大型の丸木舟も、カツラでできていたけれども、このあたりから切り出されたものではないだろうか。これは計画段階ですけれども、現在、美々川の流域の自然の再生プロジェクトというのが進められつつあります。そのときの目標が、大型の丸木舟でこの源流まで到達できるだけの水量を確保するというのが一つ、もう一つは、かつて切り出した大きなカツラがそこで生育ができるような条件を作り上げることです。これはまた二、三百年かかるのではないかと思いますけれども。

そこで、今度はウトナイの話なのですけれども、実はここで目賀田帯刀が絵図面をかいた少し後に、イギリス人のイザベラ・バードという女性が、しかも単独の外国人で日本を旅行した最初の人だろうと考えますけれども、当時その47歳の女性がここを通っています。彼女は旅行家というよりほかない人で、特に職業としてというのではなく世界中をあちこち歩いている人ですけれども、日本に興味を持って、東京から東北地方を通過して函館へ渡り、函館からほとんど歩くか、あるいは馬に乗るか、部分的には人力車で、当時すでに入っていたのです。そ



ピビ船着場の図(苦小牧博物館)



苦小牧東インター付近



エゾノコリンゴ



ウメノキゴケ



美々川上流のバイカモ



美々川源流部

れで、苫小牧を通過して平取まで到達した人です。その人が、自分の妹に送る手紙の形で日記を書いています。その中の一節なのですけれども、この辺のことをこんなふうに書いています。

「私は札幌に至る、よく人の往来する道から離れてうれしかった」

面白い言い方ですね。つまり、寂しいほうへ行くのを喜んでいるのです。それで、

「私の眼前には、どこまで続くか分からないようなうねうねした砂地の草原が続く。これはヘブリディーズ諸島（スコットランド北方の島々）の砂地にも似て、砂漠のようにもの淋しく、ほとんど一面に矮小な野バラや釣鐘草に覆われている」

ここで言っている「矮小な野バラ」というのは明らかにハマナスだと私は想像しますがけれども、釣鐘草というのはちょうど今、咲いているところでしょうか。ツリガネニンジンのことです。

「どこでも好むままに道をつけて進めるような草原である」

これが、イザベラ・バードが書いた勇払原野の、殊に海岸に近いところの描写なのですけれども、これは現在でも全く同じだといってもいい。現在でも通用するような表現です。今でも全く同じように、こういった草原を、私たちは勇払原野で見ることができる。そういう場面です。

そのほかにもさまざまな描写がありますが、勇払原野については、今から150年前のイザベラ・バードの描写と（今の風景に）そんなに違いはない。基本的には全く違いがない。そういう風景が残されているというのは、私たちは喜ぶべきではないだろうかと思えます。

もう一つ、ブラキストンという人です。津軽海峡が一つの動物学上の分布の境界線である。例えば津軽海峡以北、つまり北海道にはニホンザルは住んでいない。ニホンイノシシもいない。鳥の種類も津軽海峡で区切られる　という動物分布上の境界線を設定するデータを集めた人で、名前はご存じの方が多くのではないかと思います。そのブラキストンがこんなことを書いています。

「シーズンになるとたくさん白鳥が渡ってくるというアシのよく茂った湖のそばを通り、それから旅行者は、木の茂った軽石の台地の橋に沿って勇払川沿いに行くことになるが、この川にはこれらの台地の間に食い込んでいる峡谷から水が注ぎ込んでいるのである。

このようにして旅行者は、川の本래の水源近くであり、台地のふもとでもあるところに小さく家がかたまっている美々に到着すれば、やれやれという気になるだろう。ここにはシカの肉を保存するため、政府の建設した缶詰工場がある。しかし、たとえ今はシカがこの地方にたくさんやってきても、将来は減少して、その工場の使用は困難になるだろう。美々からは主として小型のカシワの木が生えている森を通る真っ直ぐな軽石の道路が平たい高地まで5マイルばかり開通しているところを上って行くと、チトシ（千歳）の駅馬中継所に到着する」

これは、美々川沿いに千歳まで行く描写です。これも基本的にはそんなに違いがない。軽石の道路というのはもちろん、今では国道36号に取って代わっていますが、基本的には全く同じルートですから、この描写も風景も、ブラキストンが130年前に歩いた風景とそれほど違いはない。今ここに見ていただいているのが、現在の36号が通っているところなのですけれども、そんなに違いはないと考えていいのではないかと思います。

さてそこで、これから私たちは勇払原野というものをどう考えたらいいのだろうか。あるいは、もっと楽しむためにどんなことを考えるべきだろうかということをお願いしたいと思います。

今、130年前とそれほど風景的には変わっていないだろうと申し上げたのですけれども、例えば植物の点からいってもほとんど変わっていないということが、ほかの細かい描写から読み取っても言えるだろうと思います。この辺で見られるのは、皆さんよくご存じのイソツツジとか、クルマノウグイスカグラというのはハスカップです。カンボク、エゾニワトコ、ナワシロイチゴ、そういう灌木類がこの辺には非常に多い。さっき写真に出てきましたけれども、エゾノコリンゴというものもある。それ

から、イザベラ・バードが描写した海岸に近いところへ行きますと、ハマナスが出てくる。今名前を挙げた植物で、ちょっと植物のことをご存じの方はお分かりになるのではないかと思いますけれども、湿ったところ、つまり湿原のものと、乾燥した火山灰地のものと、もう一つ砂丘のものとが交ざっているわけです。今挙げた数種類の木本の植物の中でも、湿原のものと火山灰地のものと砂丘のものととが交ざっているのです。私はこれが勇払原野の特徴だと言っていいと思います。ほかの原野、例えばサロベツ原野になりますと、完全に湿原のものばかりです。何しろ湿原なのですから。根釧原野ということになりますと、これほとんど火山灰地のものになります。一部湿原も交ざっていますけれども。ただ、ほとんど同じところ、例えば数メートルとか十数メートルしか離れていない、ちょっと高いところには砂丘のものがある。そうかと思うと、ちょっとへこんだところにはすぐ、湿地のものがある。それから、火山灰地のものがある というのが交ざっているのは、勇払原野だけなのではないか。先ほど石狩原野というのもあったり、幌向原野というのもあったり、原野というのがいろいろあったと申し上げましたけれども、そういったものが複合的に存在するのは、勇払原野ではないだろうか。だから、植物のいろんなものが交ざって見られるというわけです。その点が非常に面白いのではないかと。

それからもう一つは、ここで結構水面が見られる。目賀田帯刀が130年前にかいた絵にはたくさんの水面があった。現在はだんだん減ってきました。水位が落ちてきたというところもあります。川の切り替えて消え失せた町もあったと考えられますけれども、もとはもっとたくさんの水面があった。それは少々変わったということもありますけれども、いまだに私たちは、まさにウトナイを持っていますし、弁天沼もありますし、美々川も流れている。先ほど申しましたように、かつてかなり大型の丸木舟が最上流まで行けたという美々川も水位が下がっていますけれども、これも今、美々川の自然再生計画が進行中です。結構長くかかるとは思いますけれども、それができた暁には、今よりもっと上流まで、丸木舟を使うということはありえないと思いますけれども、例えばカヌーで上っていきける。上らないまでも、最上流から下ることができる条件を再生できたら、さぞよかろうと思います。

そこで、コモンズという話にこれを結びつけなければならぬのですけれども、先ほど小磯先生がコモンズについては十分にお話をしてくださってダブるところが出るかもしれませんが、日本でもコモンズに近い考え方はあったわけです。世界中にあったのではないかと思いますけれども、日本の場合ですと、入会地とか入会権という言葉が昔から使われて、あるエリアを共同で使う。日本でそれを実際にやったのはあちこちにありますが、東北地方ですと、例の茅葺の厚い屋根を作る。昔はかなり広い範囲で存在しましたがけれども、茅のポリウムを集めるのがとても大変です。全部一遍にとてできない。村中の茅を刈っても何軒もできない。そうすると、順番を決めてくじを引いたこともあるかもしれませんが、あるエリアの茅場の茅を村人総出で刈って、例えばAさんの家とBさんの家とCさんの家を先にやる。次の年はD、E、Fと、順番にやる。そういうことにして平等に茅を使う。我先にやっけてしまいますと、結局どこもうまくいかなくなります。

それからもう一つは、茅葺屋根を厚く葺くということは、相当の人数を必要とします。1人ではとてもできない。それで、みんなでAの家を片付け、Bの家を片付けてとやっていく。システムとしてこれを、「結」(ゆい)という言葉も使われた。まさに住民たちが寄り集まって、結んで共同体になる、というところから「結」と。結束を示す言葉と言ってもいいかもしれません。そういうふうにして共通の利益を分けて使っていた。これが日本流コモンズと言ってもいいのではないかと思います。

現在ではそういったことが必要なくなりましたから、てんでんばらばらでやっているということになるわけですが、イギリスの場合も実は、同じようなことがあったようです。そして、最後に残ったのが、道路の通行権だった。道路というのは大きな道路ではない。村から町へ行くのに、だれでも一番楽なところ、最短距離を歩きたがります。しかし、人の領分の土地、例えば牧場の中を通っ

ていったほうが楽で、しかも早く行けるというルートがあったわけです。そういうときに、道路そのものの通行権、通る権利、イギリスでは「ライト・オブ・ウェイ」という言葉がいまだに使われていますけれども、通行権は村人に全部与えられている。というわけで、人の土地だろうがなんだろうがむちゃくちゃにという意味ではありません 昔から通行していた権利ということで、保障される。それもコモنزの一つの表れと考えられています。

ただし、今申しました通行権というものは、堅い意味ではなしに、今では村から町へ行くのに何も細い道ばかり通っているわけではありませんから、村人が現在実際にそこを使っているということではなしに、今度はよその人たち、町に住んでいる人たち、あるいは外国人が来てそこを楽しむためにも、通行権が保障されるところが増えています。むしろ増えていると言ったほうがいいと思います。それが現在、「フットパス」といわれています。フットパスという言葉は、英語で言うと物々しい、特別なように聞こえますけれども、簡単に言うと「踏み跡」です。「道ができるから人が通るというものではなくて、人が歩くから道ができる」という言葉がありますけれども、まさにもともとは踏み跡です。一番歩きやすいところ、一番近道をみんなが歩くとそこが自然に道になる、ということで、それが「フットパス」の語源だと思います。まさに踏み跡です。日本でも、踏み跡という言葉がありました。そういうものを設定して、あるいは新しいものを作るという意味ではなしに、すでにあるものを確保して、そこをみんなで楽しむ。これはまさに、コモنزの思想だと思います。

それで、フットパスの幾つかをご覧に入れます。



これはイギリスの南にある荒野、日本流で言うなら原野と言ってもいいと思います。この石ころのところを歩くのではなくて、遠くに細い道が見えますけれども、これとか……。あるいは、実際に人が歩いています。道があるのかないのか分からないように見えますけれども、ちょっとはげているような、草が少ないようなところを歩いているのをご覧になれると思います。こういうところを歩いていきますと、大きな岩があつてみたり、ここからずっと道が見えます。これがまさにフットパス。途中に石切場があつたり、池があるところ、この辺にずっと道があるのをご覧になれるのではないのでしょうか。こういうふうさまさま風景のあるところを楽しみながら歩いて行くというのが、フットパスの一例です。こんな荒野ばかりを歩くというわけではなく、町の中を抜けていくということもあります。例えば、ずっと歩いていきますと、小さな村に到達する。こういうところには大抵、パブがある。ここへ寄って、ビールでもひっかけてまた歩き出す。最後には、ビールを飲むために歩いている

のか休むために歩いているのか、どっちか分からなくなるということがよくあるのですけれども、これもフットパスの一つの楽しみと言って良いのではないかと思います。



最後に、荒野というのは北海道で非常に特徴的なものと考えていいのではないのだろうか。風景的にもそうです。イザベラ・バードが古い日記に書き記したように、何かどこか人を引きつける。淋しさを求めるといのはちょっと言い過ぎかもしれませんが、そういった面もなきにしもあらず。よく「荒野を目指す」なんていう言葉がありますけれども、そこには特有の感じを持たせるようなものがあります。人を引きつけるのはにぎやかなものばかりではない、と考えてもいいでしょう。

そして、これは後で、ここをずっと扱っている草薙さんからお話が出るのではないかと期待してきますけれども、このあたりの森林の風景、森林の要素で一番大きいのは、ミズナラとコナラだと思います。コナラというのはミズナラの葉の小さいものですが、このあたりが一番なのです。北へ行きますとどんどん減って行って、コナラの北限は札幌近辺くらいまで。もうちょっと北まであるかもしれないけれども、代表的なものはこのあたりだと考えていいと思います。そういったものがここに存在するというのも、苫東、つまり勇払原野の、あるいは勇払原野周辺の一つの植生的な特徴だと思います。

そして雑木林は1種類ではなくて、しかも大きな木ばかりではなくて、何回も切られている。例えばこの辺ですと炭焼き釜が昔はたくさんあって、炭を焼くために萌芽とって、下から幹が幾つも分かれて出る種類。ミズナラとかコナラがその代表的なものなのです。本州へ行きますとクヌギなどがそれに当たるわけですが、こちらではクヌギはありませんから、コナラ、ミズナラで炭がよく焼かれていた。そういう林がこのあたりの特徴だということになります。

皆さん、ここで思い出される方もいらっしゃると思いますが、昔話に「おじいさんは山へしば刈りに、おばあさんは川へ洗濯に」という言い方がよく出てくる。かちかち山のためきにもそういうのが出てきた。では、「山へしば刈りに」といったら、何をしに行くのか。ここで言っている「柴」というのは、牧草の芝のことを言っているのではなくて、たきぎのことです。山へ、というのはすごく高い山へ行くわけではなくて、裏山へ取りに行くということです。それから、「おばあさんは川へ洗濯に」というのは、大きな川を言っているわけではない。多分、小川でしょう。おばあさんが落ち込んでもどうということないような川ということになる。(笑い) そこでジャブジャブと洗濯をするという風景を示しているのが、今の言葉です。そういったものがここに存在した。つまり里山の風景だと言っていいと思うのですが、所有は何か分かりませんが、じいさんが裏山へ行って柴を刈る。今はたきぎを取ってくるということはまずありえないと思いますが、木の実を取ってくるなんていうことは今でもある。例えばハスカップをちょっと取ってくる。それをアイスクリームの上にかけて食べるという随分ハイカラなじいさんだということになりますけれども、そういう風景。

それから、「川へ洗濯に」といっても、まさか今、川へ洗濯に行くことはありえない。私の考えでは、きれいな水を示しているのではないだろうか。つまり、洗濯しても何でもない。そんなのは世界中どこにでもありますけれども、川へ行って洗濯するというのは、きれいな水だから洗濯するわけです。それはつまり、きれいな水の存在を示している。ついでに、おばあさんが小魚をちょっと失敬してくるということはあったかもしれませんが、そういうことのできる場が大事なのではないだろうか。しかも、ここではまだ、それができるのではないか。先ほど美々川のこと、水のきれいさを示すバカモが存在するというお話をしました。写真も見いただいた。それはまさに、勇払原野でこそ楽しめる水の風景、水の場であると言っていいのではないかと思います。

そういったものをどうやって具体的に楽しむか、あるいは楽しみをもっと広げるか。これは必ずしも、勇払原野と呼ばれている平らなところばかりでなくてもいいだろう。私が申し上げたいのは、ちょっと千歳の方に行きますと、この周辺には、最近できたイギリス風のイコロの森という、なかなかきれいな、かなり自然に近い条件を生かしたところがあります。お庭と言ってもいいでしょう。それ

から、ノーザンホースパークというのがあります。それから、美々川そのものは、今でこそ水量が少々足りませんが、もう一息でカヌーが上流まで行けるようになるだろうと考えています。そういったものが存在する。それから、海の方へ行くと、最近サーフィンがこの海岸でも盛んになっている。そういうことを全部、つなぎ合わせてもいいのではないかと。てんでんばらばらにホースライディング、ホーストレッキングができる場があって、それからイコロの森というイギリス風の庭園が存在して、美々川があって、それで草薙さんがやっている苦東のコモンズがあって。だけどコモンズというのは、先ほど小磯先生がお話しになったように、言ってみると「みんなのもの」である。ある節度を持って楽しむ限りは、みんなのものである。あるいは、そうでないとみんなのものにならないというふうなお話をなさったのですけれども、それをやるためにいろんな見方、いろんなものが設定されてもいい。それを全部、それこそフットパスでつないでもいいのではないかと。今日はカヌーに乗るかもしれないけれども、次の週は乗馬で楽しむ、次の週はサーフィンをやってもいいかもしれない。次のときはイングリッシュガーデンでお茶を楽しむことがあってもいい。そういったものの組み合わせを、あるいはネットワークを考えると、この苦東、あるいは苦東コモンズと言っていると思いますけれども、もっと楽しいものになるのではないかと。勇弘という、ここ130年方、風景的にも、あるいは植物の構成的にもそれほど変わっていなかったもの、いわば資源のようなものをもっと生かすためにも、コモンズという思想が非常に重要なのではないかとということをお願いして、私のお話を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

（司 会）

辻井先生、どうもありがとうございます。

ここで10分少々休息の時間を取らせていただきます。後半のパネルディスカッションは3時10分より始めたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

（休 憩）

5. パネルディスカッション

(司 会)

それでは、本日の後半のパネルディスカッションを始めたいと思います。

では、コーディネーターの小磯先生、よろしくお願いいたします。



(小 磯)

それでは、パネルディスカッションをスタートしたいと思います。

私、コーディネーター役ということで進めさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず、パネラーの自己紹介をお願いしたいと思います。草薙さんからお願いできますでしょうか。

(草 薙)



草薙でございます。苫東の環境コモンズの事務局を務めております。それから、これを言うと面倒になるのですが、小磯先生のところの環境コモンズ研究会の事務局も一緒に務めております。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

(宮 本)



「ねおす」の宮本です。平成19年に全国植樹祭が苫東の一部で行われたのですが、その跡地利用をどうするかということで、植樹をされた方々、あるいは関係者でいろんな議論をしてきた中でその取りまとめ役みたいなものを仰せつかったものですから、それを機にこの研究会にも参加させていただいております。よろしくお願いいたします。(拍手)

(原 田)



原田でございます。「イコロの森」の森の学校長ということで、先ほどから何度かイコロの森というお話が出てきたかと思いますが、実は私自身は日常的に手稲の圃場で苗を作っている、そちらのほう为中心の仕事ということです。苫東の方に関しても、苫東の環境コモンズを中心にしながら、私もイコロの森もそれと連携していく取り組みをぜひ進めていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

(小 磯)

以上の3名に、基調講演をしていただきました辻井先生、それから私がコーディネーター役ということでこれから1時間程度、パネルディスカッションを進めていきたいと思います。

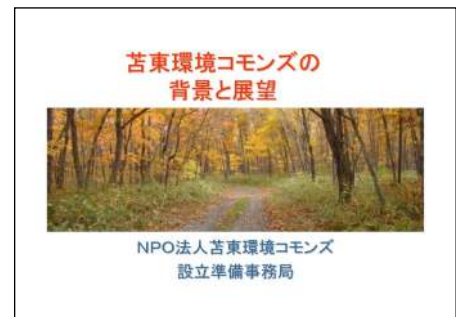
今日は、最初に私から研究会の経過報告、コモンズの考え方、苫東の再生についてお話ししました。引き続き辻井先生から、非常に興味深い「勇払原野」という視点で、いかに楽しんでいけばいいのかという基調講演を頂きました。

今日のメインテーマは「苫東環境コモンズがめざすもの」ということで、具体的にはNPO法人の立ち上げに向けての準備を進めているというところで、これまでの経過、今後の予定、その取り組みについて、草苅さんから具体的にお話を伺うところから始めたいと思います。

(草 苅)

小磯先生、辻井先生には、苫東という狭い概念ではなくて、コモンズというもっと大きな概念とか歴史的なことを非常に分かりやすくお話しいただきました。私はその対極にある、非常に現場的な話をさせていただこうと思います。

ここに映っておりますのは、辻井先生が先ほど自生地としては北限だとおっしゃったコナラを中心とした雑木林です。手入れをした雑木林がこんなふうな紅葉に仕上がってくるというのが、あと1カ月後ぐらいに迫っているということです。この辺を中心にして苫東環境コモンズの設立経過のお話を進めてみたいと思います。



「地域の財産」とか、いろいろな評価をされるようになってきました勇払原野、その苫東ですけれども、「コモンズ」の頭についている「環境」といったものが一体何なのか、ちょっとさらっておきたいと思うのです。皆様の資料の中に、苫東環境コモンズというNPOは何を目指して、どうしようとしているのかというチラシがあるかと思いますが、この表紙に12枚の画像を一緒に張ってあります。この中に、見ていると何となくおっくるものが環境コモンズでありたいというつもりで作ったものです。具体的に言うと、最初の火山灰台地、湿原、原野といった部分は辻井先生がご説明されました。苫東の場合は標高が20メートルちょっと、25メートルというところが最高標高ですが、それからゼロメートルまでの間に火山灰台地湿原、砂丘があるということです。

それから、環境のもう一つの大事な部分は、これもご紹介いただきましたように、ミズナラ・コナラ林というものがあること。あるいは、もうちょっとマニアックに申し上げますと、ミズナラ・コナラ・ハンノキ林という、ハンノキからミズナラの林に変わる途中のような植生もあります。それから、原野景観、里山景観があります。それと、今、苫東の原野が非常に注目されているというのはきっと、この身近な里山感覚だと思います。昨年12月に北海道の「モーリー」という環境雑誌の中に、苫東のつた森山林というところが里山の象徴として描かれました。考えてみますと、つた森山林の初代は蔦森百一さんという方ですが、日露戦争の御下賜金をもらってあの周辺750ヘクタールの裸山を買ったというのが大正2年(1913年)ですから、今から96年前になります。それからずっとここに居を構えて、馬小屋を作り、実に里山的な活動をしてきました。現在までで約100年になるのですが、今回「モーリー」が選んだ里山というのは、その100年の歴史の中の60年分を蔦森さんがまさに里山として使い、後半の40年を苫東会社が苫東の中の緑の拠点として扱ってきました。まさに100年の歴史を里山として評価したのだということを昨日、ちょっと思い出しました。そういうところで、苫東とい

うのは雑木林としてはちょっと特殊な位置になったかと思います。

ただ、買収をして雑木林等を買った時点は、その山林は実は、こんな陰々滅々たる林がほとんどです。まだかなりの部分がこういう状態で苦東には残っているわけです。つまり、つるに絡まれて、隣の木に押され、木の表情が分かる人であれば、ひょっとしたら樹木が呻いているのではないだろうかと思うような状態のもの、これがほとんどなわけですね。それを手入れすることによって、空の見える……何となくお感じいただけるのではないのでしょうか、樹木が多少喜んでいような感じに見えます。林の手入れの前後でこのような変化が見えてきます。



これは、その樹木がどういうふうな形で生えてきて、どうなるかということを示したのですが、広葉樹林、ミズナラ・コナラの場合は特に、一度伐採しますと、こんな形でたくさんの芽が出てきて、直径 20 センチぐらいの樹木に育っていくわけです。これを右下のように切りますと、また出てくる。いわゆる持続可能な林をずっとこうやって作っていたというのが、広葉樹林の仕事の仕方の歴史なわけですね。大正の初めは北海道が木炭を産出する一大メッカだったわけですが、石炭の前にはそういう時代もあったということです。



こういったものの手入れをどうやっていくかですけれども、そういった場合にやみくもに切るというのではなくて、一応マニュアルもありますし、その場その場の林がどういう状況になっているか科学的に調べ、密度がこのぐらいの林であればこの程度までにしていく、ということ調べていきます。そして、モデルを作って切っていく。実際にこの林の手入れをしていった現場というのが、ここです。500ヘクタールの林の真ん中に作業小屋を作ってもらったわけですが、不思議なことに、里山といったものも、500ヘクタールあるだけでは実はまだ里山ではない。むしろそこに山小屋のようなものを一つ建てて、その周りに人々の営み 先ほどのつた森山林がそうですけれども が行われて初めて、里山ができてくるという経路になります。

この小屋のこの風景というのは、何年にもわたって少しずつ周りの林を間伐して、薪に取って、そういう状態になってきて初めて、ここに「Welcome」というサインを出せるような状況になってきました。右下の写真はカラマツの保安林だったので、こういった作業を淡々と仕上げていきます。



これからの苦東コモンズが作業をするということの参考のためにここに書いてみたのですが、私のような週末しか空いていないサラリーマンが、11月から5カ月間週末1日だけ働くことにすると、大体1ヘクタール(100m x 100m)の林を1人のサラリーマンが片付けることができます。

とりあえずは、コモンズが雑木林、特にコナラ・ミズナラの林を手入れするというのがこれまでの延長線として最初に出てくる話になりますので、林のことをまず述べます。なぜかと申しますと、実は苦東の環境をどのようにしていくかという指針を環境アセスメントの中で定めていますけれども、そのアセスメントの中では、苦東の中で大事に守るべき自然の筆頭として「ミズナラ・コナラ林

の保全」を挙げています。それを苫東環境コモンズは、中心となる事業としてカバーしていく。そういったところを先ほどのようなやり方で手入れしていくと、まず出てくる変化を次に三つだけ載せてみました。

まず、大変気持ちよくなります。科学的にどうかは別にして、情緒的に大変気持ちよくなる。こういう作業をしながら、特に里山の風景というのは人の営みがついていくのだということがだんだん分かってきました。それがつた森山林のあの素顔に滲んでいったのだらうと思います。そういうことからいくと、普段使われない言葉でありますけれども、自然とかネイチャーとかという言葉の次に、人が手をかけたつきあいやすい自然という意味で、「手自然」という言葉がかなり現実を表しているといえます。この雑木林は、左側を手入れするようにして、右側はそのまま放置しておくというやり方にしてきたところです。ちなみにこれは、石油備蓄基地から北に向かっており、左側が苫小牧市、右側が厚真町ということになります。

次に、手入れをした雑木林に起きる変化の最も典型的なことは、紅葉が際立っていくことだと端的に言えると思います。結局、樹木が伐採されて、その間に光が入ってくるようになると、明るいところから暗いところ、乾燥したところから湿ったところ、いろいろな環境が出てくる。その中で特に、樹木の葉っぱに光合成が発生して、紅葉が非常に鮮やかになってくる。これももちろん、左が手入れした側、右側は何もしないところです。

それから、もう一つ出てくるのは、総合評価と言っていいかもしれませんが、昆虫相が変わってくるということです。これはいろいろな方にご協力いただいて、雑木林の中の手入れをしたところとしないところで夜、昆虫を集めてみたわけですが、右側のほうがいろいろな種類が出てくる。これは雑木林の中の手入れをしたゾーンで、光で集めたものです。つまり、雑木林に出てくるいろいろな変化の中の三つ目は昆虫相が豊かになること。もっと言えば、鳥とかいろいろなものに影響しているのだらうと思います。端的に今、三つ申し上げたところです。

こういった形で気持ちのいい林ができ上がってくるときに、もう少しいろいろな方が入って来られるようにする手だて ちょうど辻井先生が紹介されたフットパスという概念 を、苫東の雑木林あるいは草地の中に持ちこんではどうかと考え、早速作ってみました。英国のフットパスを例にしたのですが、その典型が左側のこれらの写真です。苫東の中の柏原などの風景と全く遜色ありません。詳細は忘れましたが、フットパスの経済効果はイングランドだけで年間1兆円と言われており、昨今、北海道の各地でも試みられてきました。

もう一つは、こういった雑木林の軟らかい環境についてですが、ドイツのいろいろなところに森林を取り込んだ保養地がありま



す。ここにご紹介しているのは、ヨーロッパトウヒを伐採して、全幹そのままにしておきながら、林業をしながら人々がそこを散策する。患者さん、高齢者などいろいろな病気を持っている方々が、森の散策を医師に処方され、ここをフットパスとして利用していくということです。こういった考え方も、今の苫東の立地環境にとっても役立つものだと思います。それで実現しようと思っておりますのが雑木林のフットパスですが、一つはすでにでき上がりました。手入れをし終わった雑木林のゾーンに笹を刈ってフットパスを作るのです。それから来年デビューしようと考えておりますのは、柏原のこのゾーンには、英国のフットパスにも勝るとも劣らないようなフットパスができると思います。これは何をするわけでもなくて、先ほどの小磯先生の写真にありましたような小さなサインを所要所に立てかけることによって安全に周遊できるゾーンに簡単に変わっていきます。それから、こういう苫東の中にあるいくつかの小さな宝を結んであげるという概念図を作っていくことによって、苫東全体、1万ヘクタールを経巡ることができるということもイメージされます。その実現に十分な程度に、林道も農道も苫東にはあると考えています。



それから、苫東環境コモنزの原型というお話を小磯先生から分かりやすくしていただいて、私もあらためて思ったのですが、愛護組合とか育林コンペとか自治会、それからファンクラブという、いくつかの試みの違うグループが参集して来られました。これからはかかわって来られるわけですが、そのベースになっているものは何かをもう一度考えてみますと、やはりコアになるものの一つは湿原原野にあるハスカップです。ハスカップが極めてコモنز的であるというのは、昔から地域の人が7月上旬から8月上旬にかけて自分の思い思いのフィールドに行き、ハスカップ採りをやっていた。ハスカップといえば苫小牧の夏の風物詩と言われるぐらいですけれども、考えてみれば、みんなですごい場所に立ち寄って思い思いに地域の産物を頂いてくるというのは、もともとコモنز的な部分をハスカップが秘めていたということだと思います。

それから、原型になる素材のもう一つは里山的な雑木林だと思います。それから、火山灰台地の防風林。これが、来年デビューするフットパスの一番大きい構成要素になると思います。それから、浜厚真のサーフィンで有名になった自然海岸です。こういった自然海岸と海岸植生。大体大きく言ったらこの四つが、苫東環境コモنزの環境部分の原型なのだと思います。

では、苫東環境コモنزが一体何をすることを簡単に述べたいと思うのですが、資料に「設立趣旨書(案)」をお出ししてあります。

苫東環境コモنزというのは今までのハスカップ採りとどこが違うのかということを中心に表現してみますと、今までは一方的に頂いてくる「テーク・オンリー」だった。ところが、環境コモنزではこれから、「ギブ」、つまりこちらから能力なり管理作業なりを提供し、少しでも環境にいいことを出しながら、なおかつ自分のかかわり方は「ローインパクト」にしていくということです。ごみは捨てない、山火事は起こさないという意味で、ローインパクトにしていく。「テーク・オンリー」から「ギブ&ローインパクト」へ行くのだというのが、苫東環境コモنزの一番はっきり言える、具体的なところかもしれません。さらに別の言い方をしますと、現況の緑地の利活用の検討をしたり、調整をしたり、広報をしていくという一つの社会的な部分であり、現況緑地の利活用の具体的な展開

ということで、コナラの雑木林の保育、フットパスを中心にした利活用、ハスカップ祭りとか各種の季節のイベントと、コナラ林をどうしていくかという調査研究という大きい二つで構成されていくだろうと思います。

それを実際どこで活動を展開するのかというのが、この図です。試みに環境コモンズ研究会の先生がたに専門的な立場でご検討もしていただきながら、NPO側の素案として10カ所、まとめてみました。時間の関係上、細かいことは申し上げませんが、機が熟した順にこの場所の保全と利活用を考えていくということです。

それから、苫東コモンズを特徴づけていくものは何か、二つだけ申し上げたいと思います。一つは、北欧諸国における万人権の法制度にルーツがあるのではないかと、という点。この辺のところは宮本さんが大変お詳しいのでお話しされるかもしれませんが、北欧には、一定程度のルールを守れば人の土地でも入っていい、という制度があります。その背後にある考え方を見ると、森はみんなのもの、ということだと思えます。それからもう一つ背景にあって、特徴づけるものは、漁協婦人部の方々が今、川上の山に木を植えているという運動をご存じだと思いますが、あの部分とかなり相似形な部分があります。つまり、苫東という自然の宝のような部分を、都市住民の方が労力を出すからギブ・アンド・テイクで使わせて、という関係なわけです。どう応援したらいいか、ここ数カ月の間に実にいろいろな方に聞かれました。作業とか技術とか資材とか資金とか知識とか、いろいろあると申し上げました。

では、どんな方が会員になっていただくことになるのかと言いますと、まず苫東原野、苫東の環境保全のために活動する人、実働する人、それからトラックとか資材とか技術を貸してあげてもいいという人、それから活動には体力的に自信がないのだけれども、資金で応援してあげますという人です。大きい二つ目では、各種イベントに参加したいという方です。三つ目は、ネットワークに入って定期的に情報交換をしたい人です。22年度は、今申し上げたことを積み上げながらやっていこうと思っています。通年の活動を通じた巡回とか清掃も、その中でやっていければと思います。

それから、NPOの会員の特典は何か聞かれることがあるのですが、一つは、通年でアクセスできること。それから、活動フィールドはメンバー個々人が「私がかかわっている山」とか「私の林 my forest」などという言い方をさせていただこうと考えており、そういったことも特典の一つに入ってくるのではないかと思います。

これからのことですが、実際の現場で活動の担い手になる方がそうそういらっしゃるわけはありません。ですから、とりあえず今のネットワークの中で、腕に自信のある方、技術に自信のある方、あるいは「お金ならある」という方も含めて、会費 3,000 円を前提にしながらいろいろな方に声かけをして、できることからやっていきたいと思えます。とりあえずは、今月の末に設立総会を開きます。認可の申請をして、ひょっとしたら 2009 年 12 月ぐらいに認可されるのではないかと思います。いつ入会できるかというお話につきましては 2010 年の 1、2 月ぐらいから、何らかの形で連絡を取って、希望者を募ってまいりたいと思っています。このページにあるのは私のホームページで、ここには常にこのようなニュースは出していこうと考えております。

ちょっと長くなりましたが、ご紹介をさせていただきました。ありがとうございました。（拍手）

（小 磯）

草苺さん、ありがとうございました。

私、この取り組みのことを分かりやすく「草苺プロジェクト」と呼んでおり、まさに草苺さんの思いが、具体的に皆さんの思いをうまく共有しながら結実させていくという取り組みだと思えます。草

苅さんの説明の中で、樹木が「呻いている」「喜んでいる」という表現がありましたけれども、そういう話を聞くと、まさに思いが伝わってくるような気がしました。

さて、草苅さんからお話しいただきました苦東環境コモンズの取り組みについて、研究会メンバーであります宮本さん、原田さんから、ご自身の活動の経験から、今後の苦東環境コモンズに向けての提言、あるいは今後の方向性についてのコメントを頂ければと思います。

(宮 本)

コモンズの考え方には非常に共鳴しております。私どもがお手伝いしている苦東の場所、それが全国植樹祭跡地です。コモンズのビジョンでは、ここは「山辺夕日の里」と「つた森山林」を背負った場所です。全国植樹祭跡地ということで、1万人が入った広い芝生になっており、あとは植樹祭で植えた新しい林になっています。ただ、平らで広いところなので、アクセスしやすい。僕らも今、トライアルのプログラムをやっており、幼児、車いすを使った方々もアクセスしやすかったということなので、ここはコモンズの中では「森のゲートウェイ」みたいなところになるのではないかと思います。今まであまり経験のない方、あるいは森との関係が薄かった方々もここに入って、ここで少し練習をして、奥のほうの活動に参加できる場所になったらよいのではないかと思います。

それからもう一つ、ここも、いろんな方々で話し合いながら進めているのですが、「森のコミュニティセンター」というようなコンセプト(があります)。というのは、トライアルプログラムをやったときに、幼稚園児とお母さん、それに土木関係の方が一緒になって、木の種を拾って育てるための「木の幼稚園」という名前の苗床を作ったのです。土木関係の人と子育て中のお母さんとか子供が会うということは、今の社会の中では全くないと思うのです。しかし、そこで会うことで、ごく刺激し合う場面を見て、今までつながっていなかったコミュニティを森の中でうまくつなげることで、またこのコモンズに入って来られるような創造的な人々を増やしていけるのではないかと考えております。そういったことで、この大きな活動に貢献できないかと思っております。

(原 田)

私どもの「イコロの森」は去年オープンしたばかりで、イコロの森を作る段階から含めて苦小牧市民になってまだ四、五年といった、新参加者です。イコロの森を作りながら地域の方々と接触しているさなかです。私どもの住所は苦小牧市の植苗という地区ですが、植苗地区の町内会では「町内会のあゆみ」という非常に立派な本を出されております。こういうものも参考にしながら、私どもの置かれている環境というのはどんなものなのだろうということで、いろいろと勉強させていただきました。高速道路に非常に近い位置にあるわけですが、イコロの森から1キロも離れていないところに、昭和30年代まで学校……分教場かもしれませんが、小学生が四、五十名いたと思います。ほとんどが炭焼きの関係者の子供たちで、今は全く人も住んでいない、あぁいった林の延々と続く国道から10キロぐらい奥の林の中に学校がありました。

森の在り方を考えていく中で、保護林であるとか景観林とか、私どもなりに幾つか決めながら森を扱っておりますけれども、中心に炭焼きを置きながら、もう一度循環的な森づくりができないかということで、庭、あるいは苗の生産、幾つかの位置づけも含めて、草苅さんが苦小牧で活動されている雑木林と庭づくりといった取り組みもあったかと思っておりますけれども、まさにそれに近い取り組みをイコロの森で展開しているわけです。その中では自然ガイドをやったり、面積そのものは100ヘクタールほどの森林なのですが、古い林道が縦横に走っているので、その林道を活用しながら、いわばフットパスとして利用しています。これからはホーストレッキングのような取り組みもできないか

と思っています。国道から10キロも離れておりますから、もう少し活動しやすい形態といったことで、馬も利用できないかということです。そのためには、ほかの土地との関係もありますので、そういった調整もしながら進めていくつもりです。

あるいは、イコロの森あたりはちょうど、今から7000～8000年前の縄文海進で波打ち際に近い状態で、貝塚が出ました。私どもが炭を作るのに7000～8000年前の粘土を使うのですけれども、考えてみたら、これは縄文土器の粘土そのものかと思います。何人かの陶芸家の方に焼いてもらったら、「意外と面白い、いい粘土ですよ」ということで、粘土で陶器を作るような教室をやっても面白いと考えております。そういう中で勇払原野そのものを意識した場合に、環境コモンズは本当に勇払原野の中心部を占めているわけです。例えば、森林率10%といわれているイギリスではフットパスが非常に発達していますし、森林率が30%といわれるドイツでは、ワンダーフォーゲルに代表されるような、歩くということに慣れ親しんでいます。ドイツ人は、30%の森林が一番きれいなのだと言います。確かに、どこに行っても絵はがきになるような景観が広がっています。それに対して私どもは森林率90%、まさに林そのものです。それでも雑木林ですから非常に明るい林ですけれども、50年前までは全部薪炭林だったから、まだまだ手入れをしていかなければならない森林です。

そういう中で、苫東の環境コモンズの対象にされている地域は、非常に多様性に富んでいる環境かと思えます。野原があり、森林があるという点で、苫小牧周辺全体を考えた場合に、環境コモンズと私どもと、ほかにも取り組みされているところが幾つもあると思えますけれども、そういったところが重層的に取り組んでいく中で、きっと非常に面白い地域になるのかと思えます。先日、私どもで水に対するプロジェクトをやったときに、自然ガイドをされている村井さんが「きっとここは知床以上ですよ」というお話をされていましたが、そういう点では、自然多様性を含めて非常に面白い地域だと思えますし、今後の環境コモンズの取り組みに私どもは非常に期待しております。

(小 磯)

辻井先生、いかがでしょうか。草苅さんのこれからの取り組みに対するお考えをお聞きになられた感想を頂ければと思います。

(辻 井)

感想というよりも、先ほどブラキストンの書いたのをご紹介したのですけれども、草苅さんがやっている苫東の森林の風景を、ブラキストンはこんなふうに書いています。ブラキストンは逆に……逆にとというのは、このときは石狩から千歳の方へ、つまり北から南の方へ下がってきて、「私はシカを撃つため、この千歳に1日か2日滞在したいと思った」というところがあります。そうしたら、千歳でもう少し南へ、勇払への道を3里、つまり12キロばかり進んでおいたほうがいい、という話を聞いて、「そこには炭焼き小屋があって、何か猟をしたいなら泊まることのできる」

要するに、この辺は炭焼きが非常に多かったということだと思えるのですけれども、そこにこんなことが書いてあるのです。それで、「私は」そっちへ行ったほうがいいと言われたものだから、シカを撃つために、「アイヌ人の道案内と馬を連れて出発した。私たちは乾いた平らな土地を通っている広い道路を選んだ」

ここからが面白いのです。

「道路の周辺には背の低いカシワの木やカバなどの灌木が立っているだけで、下生えは全然見当たらない」

つまり、今の条件とかなり近い。この辺はササもそんなに深くなくて、下生えはほとんどない、かな

り自由に歩けるところだったのです。そういうことが書いてあります。それから、

「ある程度歩いた後、私たちは闊葉樹類のこんもり茂った森の中に入った。この森は深い谷の左側を縁取り、谷は勇払川の源となる地域の一つに当たる」

というのだから、明らかに美々の源流のあたりなのです。

「そこを歩いて行くうち、間もなく鹿の姿が目につくようになった。私たちの前で鹿の群れが道路を横切ったとき、見事な1頭の男鹿が立ち止まってじっと私のほうを見た」

ここでブラキストンはそのシカを撃つわけです。と言うことは、今、この辺はそんなにシカが多いところではないけれども、当時はかなりシカがいたと言うことです。今、シカが随分増えて困っていると言うけれども、それどころではない。というのは、今初めて増えてきたのではなくて、逆にこのあたりは、昔の方がかえってシカが多かった。そういう時代もあったということを示しているのです。それからその後で、

「道路はやがて勇払川の谷へ下っていった」

というのはつまり、さっきお話しした美々でしょう。

「ここは舟で航行する際の最上流に当たり」ですから、例の御前水かどこかあの辺のことを言っているのではないかと思うのですけれども、

「木造の倉庫が1軒建っている。さらに少しばかり進んで、私たちは千歳から3里の道程にあるウビナイ（植苗）という木炭を焼く場所へ着き、1人の日本人とアイヌ人2人に会った」

こんなことが書いてあるのです。と言うことは、かなり昔からシカが随分多かったということと、要するにシカが食べられるような草が相当あったと言うことだろうし、もう一つは木炭です。カシワとさっき草苺さんが言ったコナラ。だから、その当時から随分木炭が焼かれていたのでしょう。それで、植苗から南の方になると、ブラキストンは後で書いていますけれども、そっちのほうは木材が適したのがないものだから、ここで作ったものを南へ下げているという話があります。まさに、草苺さんが説明したような条件の存在したところだった。違うのは、シカが今、当時から比べるとあまりいなくて、逆に今度は増えてきている状態です。それがいいのか悪いのか、植生に対してどんな問題が出てくるかというのはまた別の話ですけれども、明治の初年のころとそれほど変わらない植生を私たちは見ることができる。

さっきも申しましたけれども、原野という言葉。釧路から東の方へ行くとよく、「湿原の野外博物館」なんて言われるのです。釧路があって、厚岸があって、霧多布があって、湿原がたくさんあるのですけれども、全部実はタイプが違うのです。だから、博物館の部屋を開けて見ていくように、いろんなタイプの湿原が見られる。ここはもっと細かくて、ちょっと動くと湿原があって、砂丘があって、火山灰地があって、モザイクみたいになっているのです。すごく面白いところではないだろうか。草苺さんはそういうのを生かして、やろうと考えていらっしゃるのではないかと思います。

（小 磯）

草苺さん、あらためてどうですか。

（草 苺）

先生が何度もお使いになりました原野という言葉、それから私なんかの今の紹介で随分使いました雑木林という言葉も、とても評価の低いものの典型だった。カシワなんかも、今でも評価が低い。先生の資料の中で、ブラキストンも「平らで、この道は歩いていて全く面白くない」というようなことを言っていて、あそこに私は線を引っ張ったのですが、今はモータリゼーションとか、旅行でぐるっ

と一回りすることによって審美眼が養われ、私どもは原野も雑木林に対してもとても高い評価ができるようになってきているのだらうと思うのです。

苫東環境コモンズが発生するいい理由がありましたのは、小磯先生が最初に言われたことで、北海道においては開発とか産業とかもう一つのなりわいといったものが、実はきっと低くみなされていたのではないかという気がするのです。こんなことを言うてはだめなのかもしれませんが、人が働いてお金をもらうことに対する評価といったものが、少なくとも工業に対して温かい眼差しがなかったのではないか。それが今、いったん日本の経済が疲弊したときに、そちらのほうの見直しもあり、雑木林をいいと見直すことができる視点も変わり、したがって、本当に今、苫東環境コモンズを旗揚げするのに一番いい時期だったのではないかと私は思います。たかが原野、たかが雑木林なのですが、やはりそういう流れがあったのではないかという気がいたします。

(小 磯)

さて、あっという間に時間が経って参りましたけれども、会場に苫東の高橋さんが見えています。オブザーバーということでこの研究会にも参加していただきました。これまでの議論をお聞きになって、感想でけっこうなのですから、一言頂ければと思います。

(高 橋)



苫東の高橋でございます。地図など資料を若干同封させていただきましたが、苫東は苫小牧の東の方にありますが、行かれていない方もたくさんおられると思います。

先ほどからありましたように、1万ヘクタールを超える大変広い土地です。その中に工業用地もありますけれども、緑がたくさんあります。ただ、ご承知のように、10年ほど前に前の会社が一度壊れ、今は新しい会社としてやっておりますが、少ない所帯で活動しております。そうしますとどうしても、これだけの広い土地ですので、自分たちだけで管理するというのも非常に大変でございます。そういうときに草苅さんからコモンズのお話を伺い、当社としても貴重な緑をどうやって維持管理していこうかという中で、Win-Winの関係を作って、うまいこと緑を維持管理、増進していけるのではないかと考えました。会社として正式にどうこうということではまだないのですけれども、非常にいい試みだと思っており、私どもの会社としても何らかの形でうまく回るようなお手伝いをしていければと考えております。

(小 磯)

本当は会場の皆さんからもどんどんご意見なり、ご質問を頂きたいのですが、予定の時間も過ぎておりますので、そろそろフォーラムを終了させていただきます。

先ほど草苅さんからNPOに向けてのこれからの活動のお話もありました。会場の皆さんにはぜひ、NPOへの参加という直接的なかわりだけではなく、皆さんのお立場でできる範囲でこの活動へのご支援を頂ければというお願いを申し上げたいと思います。

今、苫東の高橋さんからお話がありましたが、1万ヘクタールを超える空間を今後、どういう形でこの地域の財産として使っていくのか、北海道民という立場で「われわれ」という言葉を使いますが、われわれの一つ大きなテーマではないかと思うのです。私はこの苫東の計画に若いころからかかわっていたと申し上げましたけれども、最初に苫東の1万ヘクタールを買収したのは北海道企業局というところで、その用地買収に当たられた方の苦労話を若いころお聞きすることがありました。

その中でも、特に「つた森山林」は当時、蔦森春明さんという方が持っておられた苫東の中核にある土地でした。そこを用地買収して、将来は工業用地にということでは、春明さんの思いもあったわけです。でも、結果的に、北海道のために自分の土地を使ってほしい、と。そのときに彼が言ったのは、「今持っているつた森山林という森の価値を、ぜひ継承する形で工業用地の中で使ってほしい」と。それが、苫東の開発プロジェクトに用地を提供するときの条件になったわけです。それが世界に冠たるインダストリアルパークと言われる、これだけ緑地のある工業基地開発計画につながっていったということです。

今日この場でなされている議論というのは、まさに蔦森さんの意思、その気持ちをどう受けとめていくかということで、38年たっているのですけれども、その理念というのは変わらないのではないかと考えております。

今、われわれが求められているものは、知恵だと思います。IBMという世界的な企業が現在「スマータープラネット（賢い地球）」というプロジェクトを進めています。限られた地球の資源を、自分たち人間の知恵でどれだけうまく使いこなしていくか。その取り組みを北海道のこれからの活性化に結び付けていくことが出来ないだろうかということで私もお手伝いをしていますが、そこで感じるのは北海道の自然環境の魅力の大きさです。地域の自然環境が持っている資源の価値を、地域の経済発展も含めた地域の力、地域の自立的な発展にいかにつなげているか、さまざまな地域、フィールドで実践していくことが大切でしょう。

苫東という工業基地空間において、環境コモンズというコンセプトで新しいNPOが誕生しようとしています。これから5年後、10年後においても、「こういう形で成果が上がりました」「こんなことをしています」というメッセージを残せるような地域でありたい、そんな思いでおります。

今日のフォーラムはあくまで、この地域における新しいNPOの誕生に向けての場ということで、多くの皆さんがこの取り組みに対して興味と関心を持って参画していただくきっかけになればというお願いを最後に申し上げて、このパネルディスカッションは終了したいと思います。パネラーの皆さん、ご協力、どうもありがとうございました。（拍手）

6. 設立準備事務局挨拶

(司 会)

フォーラムの最後に、このNPOの設立準備事務局の代表をしております原口から、ご挨拶を申し上げます。

(原 口)



ここにおります理由を先に申し上げますが、草苺さんと10年ちょっと前、先ほど苫東の高橋専務が「壊れた会社」と言われました東部開発に最後におりました原口と申します。実は、事務局で一番年を取っているのはおまえだからやれ、というのが草苺さんの命令でしたのですが、私は7年間お世話になった以降も、この苫東地域だけではなくて、今は演習林とは言わないのかもしれませんが、北大の高丘の森、ウトナイ湖、もちろんノーザンホースパークもそうですが、あちこちチョロチョロと動き回っておりました。

この素晴らしい自然環境に魅せられたといいますか、辻井先生のお話ではありませんが、100年以上ほとんど変わらない状態が維持されているこの景観は、得難いものだと思います。今日は、遠いところは帯広、平取、札幌、そして隣の遠浅町、地元苫小牧の皆さん、広くたくさんお集まりいただきありがとうございます。具体的なこれからのNPOの中身については、年内、設立が認可されるまで諸準備を行いながら、12月から来年1月以降に具体的な活動に入りたいと思っております。幅広いご支援、あるいは会員としてご参加いただければ、この上ない喜びでございます。

本日は、大変ありがとうございました。(拍手)

7. 閉 会

(司 会)

これで、本日の環境フォーラムを閉会したいと思います。

皆様、本日は長時間にわたりご協力、大変ありがとうございました。どうぞお気をつけてお帰りください。